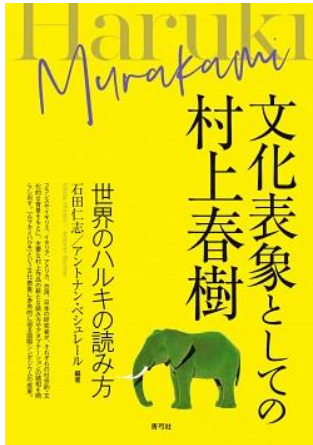


【自編著紹介】石田 仁志・アントナン・ベシュレール編『文化表象としての村上春樹』  
(青弓社、2020年1月)



この論文集は2016年に私が企画し、ストラスブール大学のアントナン・ベシュレール准教授と共同して、2018年1月と3月に東京、ストラスブール、パリの3都市で開いた国際シンポジウム「村上春樹の Real と Future」での参加者の研究発表をまとめなおしたものです。企画する前、『1Q84』（2009～2010）が世界中で話題となり、イギリスのブックメーカーがノーベル文学賞候補者として村上春樹を毎年のように上位に位置付け、10月になると日本国内では受賞への期待感が高まっていました。しかし、私は受賞するかどうかということ以上に、今の村上春樹の文学が世界に訴えるものとは何であるのかということのほうにより関心がありました。この時、最も気になっていたのは、2009年のエルサレム賞授賞式スピーチで語った「壁と卵」の例えでした。「壁」という言葉は、『羊をめぐる冒険』（1982）のいるかホテルや『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』（1985）の街の壁、『ねじまき鳥クロニクル』（1994～95）の井戸、『海辺のカフカ』（2002）の入り口の石など、彼の小説の中で繰り返し描かれてきた、互いに異なる現実を隔て／結びつける境界を思い起こさせます。そして「卵」はカフカ少年や『1Q84』の青豆や天吾、小さきものの存在につながるでしょう。その壁と卵の間に介在するのが〈暴力〉というテーマです。『アンダーグラウンド』（1997）を含め、彼の文学の根底にはそもそも人間の内奥にある暴力への衝動を描き出そうとする傾向はあったと思いますが、それが2001年の同時多発テロやアフガニスタン紛争から続くイスラーム過激派のテロ事件などの〈現実〉と結びついていったのではないのでしょうか。そう考えた結果、彼の文学において〈暴力〉からの脱却とはどのように表象されていたのか、文学を通じて彼はどのような未来を私たちに提示しようとしていたのか、そうした問題意識が「Real と Future」というタイトルに結びついていきました。

しかし、その問題意識はこの論文集の根底を流れる通奏低音であって、タイトルには使っていません。なぜならば、村上春樹の文学的なアクチュアリティ、社会へのコミットメントの通路はもっと多様にあると思うからです。暴力表象はその一部であって、より多角的に彼の文学の Real と Future を捉えたときに、そこに立ち現れるのは日本人作家・村上春樹であるとともに、世界で受容される Haruki Murakami でもありましょう。彼の文学が世界とつながる、多様な「文化

表象」としての可能性を持っていることを私としては示したくて、論文集をこう名付けたのです。

では論文集の特徴を簡単にご紹介しましょう。

全部で22本の論文を納めるこの論文集は、第1部〈翻訳・比較文学から見る村上春樹〉、第2部〈村上春樹における表象—現実・社会・物語〉、第3部〈映像との親和性と乖離〉、第4部〈文化コミュニケーションの中の村上春樹〉という四部から成ります。ここでは、彼の文学世界の豊かな広がりや、翻訳・比較文学、表象、映像、文化といった大きなテーマにくくりながら、それぞれに個性的な視点や方法で読み解いています。取り上げる作品も多岐にわたりますが、どうか、全体を通して読んでいただきたいと思います。

第1部では、スティーブン・ドッド（ロンドン大学）が永井荷風との比較、大村梓（山梨県立大学）は翻訳の暴力性、朝比奈美知子（東洋大学）は春樹作品における図書館、アンヌ・バイヤール＝坂井（フランス国立東洋言語文化大学）は紀行文の戦略性、石田（東洋大学）はイスマイル・カダレとの共通性などを取り上げています。

第2部では、ジェラルド・プルー（セルジー・ポントワーズ大学）がトラベルライティングという視点から、早川香世（都立深川高校）は教材としての視点から、杉淵洋一（愛知淑徳大学）は震災との結びつき、范淑文（台湾大学）は夏目漱石からの継承、ブリジット・ルフェーブ（リール大学）が〈森〉の象徴性、杉江美美子（パリ大学）は古川日出夫を視座に、石川隆男（台湾大学）は阪神淡路大震災との関連性、野中潤（都留文科大学）はサバイバーズ・ギルドという視点から、それぞれに春樹の文学と現実との結びつきを論じています。

第3部では、助川幸逸郎（岐阜女子大学）、中村三春（北海道大学）、アーロン・ジェロー（イエール大学）、ジョルジュ・アミトラノ（ナポリ東洋大学）、米村みゆき（専修大学）がそれぞれに村上春樹と映画表現との関係性を論じています。この部分は、パリ日本文化会館での特集でした。

第4部では、アントナン・ベシュレール（ストラスブール大学）が春樹の日本的なコミットメントの意味を、横路昭夫（輔仁大学）は日本のアニメとの親和性、横路啓子（輔仁大学）は台湾での春樹文学の受容、木村正樹（東海大学）はメディア小説として、春樹文学の文化性という問題に切り込んでいます。

村上春樹が現代日本文学を世界へと開いていった作家であることは間違いありません。しかし、我々の現実には常に激しく変貌しています。テロや暴力に加えて、2020年は未知の感染症が世界を苦しめています。これもまた自然の暴力であり、弱者を切り捨てていくかのような対策は、システム的な社会暴力となってさらに「卵」たる我々に降りかかろうとしています。彼の文学の先に、私たちはどんなFutureを見ることができのでしょうか。

最後に、この論文集は2021年にはフランス語版が新たな執筆者を加えて刊行される予定です。日本語で書かれた論文集が外国語に翻訳されて出版されることで、また新たな村上春樹研究のすそ野が広がってくることを期待しています。

【石田 仁志（現代日本文学における〈家族〉の表象、震災後文学ポスト3・11）】